

第六講 新石器時代の集落

セスクロは例外的事例とされる<テル遺跡 (2ha を超えず) の通常性 (Kotsakis, 66)

マケドニアのヴァシリカ遺跡：テル遺跡とは異なる広い遺跡。居住地は約
25ha。

マケドニアのテルミ遺跡：12ha 以上。

ピエリアのマクリヤロス遺跡：分散し移動性の高い住民。50ha 以上。

テル遺跡は実際には存在せず、平地遺跡が唯一のタイプ (Grammenos, 68)。

二つのタイプの集落

1) テル型

magoule (テッサリア)、tumba (マケドニア)

伝統的には北部ギリシアにおける唯一の住居形態

大きなテル：高さ 8メートル以上

数は少ないが、後代まで継続

小さなテル：高さ 3メートルを超えず

数多く認められる

密集した住居、居住地の連続性

集落を囲む壁によって明確な境界を持つ

集落の面積は 2ha を超えず

ギリシアの新石器研究の背景にある「オリエンタリズム」の
影響＝バルカンとは異なり、東方からの文化的影響

2) 拡張型

セスクロ：1971年のテオカリスの発掘調査により拡張型の
「都市」型居住地とされる。例外で、唯一のもの
カストラキの丘に隣接する湖成泥灰土のテラス
上に大きな集落が中期新石器時代に広がる。

テオカリスの説：ツォンタスの城塞アクロポリス

説をポリス概念に拡大

アクロポリスと居住地から成る

ポリス複合体

ポリスの規模を 10ha 以上、

中期新石器時代までに人口

3000名以上に達する。

最近の調査：丘陵の周辺に広がる居住地とアクロポリスとの構造的相違が明らか。

カストラキ丘陵：堆積物が厚さ 8.5m。

新石器時代の全地層確認（先土器層から銅石器時代層まで）＝空間的にも時間的にも住居の連続性を示す。

家屋は独立家屋で、隣の建物と壁を共有せず。建物と建物の間に屋根を持たない中庭を有する。

ポリス部分：平坦で、堆積層が数 cm しかない所もある。

個々の区画は非連続的で、出土土器はそれぞれ異なった時期に属する。

家屋の大部分は終末期中期新石器時代に属する。

家屋は密集し、壁を共有し、オープンスペースは少ない。

家屋は小型。

テッサリアでの平地にある拡張型遺跡は非常に少ない

80年代以降その存在が発見される

目立ったテルを持たず。景観的にテルは識別できない程度

集落の面積は 25ha（ヴァシリカ遺跡）、12ha 以上（テルミ遺跡）、50ha（ランガダス遺跡）など

「プロト・アーバン」ではなく、分散型の住居、居住区の移動性高い>遺跡内の居住区の欠如

セスクロの事例より、居住地の二重構造：

丘陵部分：空間の集約的連続的使用。

アクロポリス上の家屋は全く同じ場所に繰り返し立て直さ

れ、居住空間に対する主張の連続性を暗示。

丘陵部分の居住密度は低い。

拡張部分：非集約的非連続的居住。

建築活動の束は遺跡中に分散。

丘陵部分と拡張部分を分ける壁や堀の存在。

>南東ヨーロッパと類似。

拡張部分における堆積層の厚いポケットの存在：

セスクロ=4m、ヴァシリカ=3.5m、テルミ=2.5m

これらのポケットにおける居住強度の強さは顕著。

「丘陵遺跡は稠密な居住」という等式は誤り。

「拡張型遺跡は分散型居住」という等式も誤り。

北部ギリシア内陸部でのメロス産黒曜石やスポンデュロス貝（刺のある牡蠣）の腕輪の出土>50~200kmの距離を超えて移動。

物質文化の等質性=精製装飾土器の物理的な移動。

地方で製造された型式的類似性は遠く離れた居住地からやって来た個々人間の直接的社会的接触の程度を示している。

集落はせいぜい数キロ程度しか離れていない。

テルの人口は120人くらいから数百人規模。

南部ギリシアの集落は概して小さく、必要な人力に比してあまりに小さいので、近隣の数多くの遺跡群を含んでいる。

新石器時代のギリシアの建造物の遺構は圧倒的に方形の建物。

- 1) 新石器時代の建物は同じ集落の中でも大きさと建造法において非常に多様。
 - 2) 幅広い一揃いの道具の出土=様々な年齢や性によって構成される社会集団の存在。
 - 3) 床面積 20 m²~70 m²の大抵の独立家屋はある種の家族集団による居住を示している。
 - 4) 家族を示す方形家屋や部屋群はマクリヤロスの平地の拡張遺跡の一人ないし二人の居住を示す床面積 20 m²の円形小屋の証拠との比較によって確認される。
- 1 調理された食物の消費は調理されていない食料の貯蔵以上に公的な事

柄である。

- 2 後期新石器時代のテッサリアにおける壁や堀による「居住区画」への村落共同体の分化はすぐ隣の隣人と分かち合うことを制限する傾向を示している。
- 3 幾つかの末期新石器時代から初期青銅器時代の居住地では、外にある台所施設は壁に囲まれる。公的圧力と家族間での分かち合いを制限。

新石器時代の家族の壁による分化は区分は共有とは反対の、退蔵の理念の物質的表現。

野外連想（男性や、狩猟、交換等々）を伴う *agrios* とは正反対の *domus* 原則は自然（穀物の栽培と家畜の飼育）と社会（定住性と村落共同体の出現）の両方を示す象徴として役立つ。

新石器時代の家屋は生産と消費の基本的な家族単位を壁によって区分するというフナリーの議論はギリシアの新石器時代の建築の遺構や穀物倉庫の散在した証拠と一致している。

中期新石器時代のセスクロの、平地の拡張地区 B は繊細な構造の部屋の集合体によって特徴づけられるのに対して、丘陵部のセスクロ A はがっしりと作られた独立家屋から成っている。この違いが社会的に重要な違いであるということは堀と壁によるセスクロ B からの丘陵地区の人為的な隔離と丘陵地区で発掘されている大量の彩色土器によって指し示されている。

初期新石器時代のオツァキでの彩色土器と泥煉瓦家屋、無地の土器と荒打ち小屋との組み合わせもある。

長期間存続した丘陵の存在は多くの新石器時代コミュニティの存続性を示している。そのような継続性は分裂への傾向が効果的に抑制されたことを示している。

地域社会は婚姻による繋がりと、相互に訪問し合う関係、協力関係の交換等の実り豊かな組織によって維持された。

家畜は人間と同じように家族間や居住地間を移動。

土器様式ゾーンによって示される地域社会の幾つかは人間が養いうる人口にとって必要な規模をはるかに越えているが、それは同盟戦略が少なくとも部分的には別な配慮によって動かされていたことを示している。

工芸の専門化

或る人々が他人が行わない技術を行使し、その産物が生産者から非生産者へと移される、或るいはコスタンの言葉を借りれば、「或る特定の財の消費者より生産者が少ない場合

にはいつでも、専門化された生産を我々は目にするのである。」>この規定は狩猟-採集社会に於いても専門化が存在するのを認めている。実際「専門家」はいつでも存在して来たということ認めることが重要である。

石器

前期新石器時代と中期新石器時代

- ・素材原料は外からもたらされたもの（主として、蜂蜜色をした火打ち石と高品位の碧玉を含めて、黒曜石）
- ・生産物の使用は実用性に基づいている。
- ・生産物はギリシア全体に様式上の刻印や技術的な等質性を示してはいない。
- ・生産物は遠方にまで広範囲に広がっており当該時期の流通している全体量は（特定の遺跡で発見されているものと比較して）重要である。
- ・遺跡の中及び遺跡間の分布は均等である。
- ・生産物は部分的に加工されたもの或いは完成品として遺跡の中に持ち込まれるのであって、決して原材料としてではない。
- ・知識と技術の水準は外からもたらされた原材料から作られたものと地方の原材料から作られたものとの間には驚くほどはっきりとした違いがある。

外からもたらされた原材料に関しては産地での調達法と生産の方法の両方に専門化された活動のあらゆる特徴を示している（航海や／或いは採掘に含まれる技術と知識、技術を習得する為の見習い期間の長さ、一人当たりの高い生産性、失敗の無さ）。証拠はギリシア中の居住地に完成品を供給する専門化した遍歴碎石人を強く指し示している。

後期新石器時代

原材料を獲得するのに用いられる戦略と薄片にする技術の両方において、後期新石器時代の間には鮮明な地域差が現れる。

- ・メーロスの黒曜石は西部及び中部マケドニアに到達したが、少量で主に完成品としてであった。高品位の火打ち石も又重要であり、地方の原材料も又同じように利用された。
- ・テッサリアや中部ギリシア（エウボイアを含めて）輸入された原材料は支配的であり続けたし、生産の機構は根本的には変わらないままであ

った。

・対称的に、南部ギリシアでは、黒曜石の割合は増加するが、加工技術の水準は非常に多様である。

・南部では、違った方法が同時の利用され、様式毎の「地域」が現れた。

・さらに南部では、黒曜石は様々な状態で（原材料として、荒く割られ塊として、加工された石核として、云々）遺跡に持ち込まれた。

このような状況は、今ではその幾つかの島々に人々が入植しているキクラデス諸島間の航海の増加によって、そして専門化した調達によって競争状態に陥った「直接供給ゾーン」の発達によって、説明される。

「直接供給ゾーン」の中では低い水準の加工技術がしばしば明らかであり何らかの地元産の出現を示している。かくして状況は以前より以上に多様化してくる。しかしながら、逆説的ではあるが、傾向はより一層の専門化に向かってではなく、或る程度までの「脱専門化」を含む複雑な状況に向かって進んでいく。

土器

土器の原材料の調達、生産、分配それに消費の環境は石器とはかなり異なる。

前期新石器時代

・土器は、地方の原材料を利用して、あらゆる遺跡で局地的に生産される。

・陶工は単純な方法と技術を使用するが、これらは労働集約型である。

・ペロポネソス内部では、部分部分が別々の、即ち違った原材料と、仕上げと焼成の方法、それに異なった製作者によって作られた、製品がつねに現れている。しかし器形や、大きさ、製品と関連する使用法においてははっきりとは異なる。

・全体的な生産は低く、フランクティでは年間 12 個から 13 個という僅かな量の土器が生産された。

・生産規模に必要な人数以上の陶工がおり、余りにも少なすぎて自家消費に必要な自家生産を示してはいない。

・自家での、「実用性に基づく」使用確実には証拠付けられない。

・様々な土器が遺跡の中に一様に分布している。

・土器は局地的に「消費」され、地域内での土器の交換を示す証拠は非

常に限られており、長距離交換に関してはさらに少ない。

・何らかの地域毎の様式上の違いは明白である。

中期新石器時代

・土器はなお地方の原材料から作られてはいるが、少なくとも南部では、粘土の共通する調整法はあらゆる遺跡の陶工の間で分け持たれている。

・大抵の陶工は熟練した技術者であり、創造性に富み、危険を進んで犯そうとする操り手である。技術や、知識、熟練度、経験の水準は専門化した陶工の存在を示している。

・生産規模は増大しているが、それでもフランクティでの年間 100 個以下という全体の生産量を勘案すると、未だ少ない。生産はなお労働集約型であり、それぞれの土器が独特の特徴を有している。

・生産物の 90%は「精製土器」であり、そのうちの 25%は精緻に模様が施されている。数個の貯蔵用の壺と同じように、数個の料理用の土器が MN 期に初めて現れる。

・分配は遺跡の中や遺跡の間ですら行われていた。

・技術的様式的発展はそれぞれの地域中共有されているが、土器の地域内及び地域間の交換は限られている。

・強い地域毎の様式上の相違は明らかである。

後期新石器時代

・全体的に、様式地域はますます小さくなります増す数が増えて行った。「商品」や装飾様式の数が増加し、多くは（灰色地の上に灰色の上葉をか

けたものや、様々な多彩土器、局地的な鈍彩土器）はかなり限られた地域で生産された。

・幾つかの「土器」（黒色磨研土器や、後には、鈍彩土器）は非常に広範囲に（全ての地域で）分布しているが、これらの土器がそれぞれの遺跡で局地的に生産されたのか、それとも限られた生産地からもたらされたのかは明らかでない。

・ペロポネソスでは、生産規模は劇的に減少している。しかし、北部では規模は増加しているように見える。

・土器の地域間の遠距離交換は証拠付けられるが均等ではない。ペロポネソスでは、隣り合った遺跡ですら同じ土器を共有することはない。

・粗製／精製土器比率は南北ともに 30-40%にまで増加している。それは恐らく家庭内での土器の使用の増加を反映しているのであろう。生産、分配それに消費のパターンは中期新石器時代のものと比べて全く異なっていることが明らかである。原材料の調達ですらかなり重要な役割を演じるようになっていた。というのは最初後期新石器時代の土器の顔料として使用された酸化マンガンは容易に手に入りにくい、外国産の原料であった。石器の場合と同じように、ギリシア各地での土器の生産と消費は後期新石器時代以降違った道筋を辿った。確かに後期新石器時代におけるテッサリアでの土器の生産量全体は発掘で発見されている僅かな量とは対称的にそして集約的に調査されているペロポネソスの部分においてすら驚くほどの対称を成している。

終末期新石器時代に於いては、粗製／調理用土器は増加し続け、実際それらは支配的な土器と幾つかの地では 95-100%にまで達する迄-支配的な土器となった。これらの粗製土器は構成、形状それにそれらが生産される技術水準において実に多様であることを示している。

新石器時代の南アルゴリス

前 5000 年頃のキラダ湾周辺

中央に河川の河口が広がり

河口~入り江に沿って沼地が広がり

その外側の平地には Gramineae を中心とする雑草が見られる

河川の北側と東側に河岸段丘がある

北側の段丘のテラスには湿った牧草地が広がり、その奥行きは 400m X 幅は 1000m ほどある。

テラスは旧石器時代以来人々に住み続けられたフランクティの洞窟に面している。

洞窟付近に泉が 5 箇所ある

洞窟は標高 180m の小さな丘の下部にある

丘は全体がマッキに覆われている

河川の南側には標高 60m の小さな丘とその南に連なる標高 120m の丘陵群が南東方向に伸びる

北西端の小丘はマッキに覆われているがその南東部の丘陵群はナラ林に覆われている

河川の東側は、舌状に突き出た部分に沼地があり、急斜面を経て海岸平野が大きく東に広がる

人々が住む居住地はフランクティの洞窟だけである
考古学的に…洞窟前のテラス部分では農耕
海岸の平野部と丘陵部のマッキでは牧畜

キラード湾の花粉データ

最下層 (スペクトラム I …425cm) : BP6700 (BC4700)
= 中期新石器時代

← Bottema/Woldring, (1990), p.249.

深度層帯におけるナラ林の分布

丘陵部の荒れ地帯におけるマッキの分布…弱い

Quercus coccifera-type, Pistacia

マツは遠方より飛来

オリーブは見られず

集落を示す **Platanus** (プラタナス) の花粉もなし

人間の活動を示す指標あり… **Mercurialis annua** (ヤマアイ)、

Plantago-lanceolata-type (ヘラオオバコ型)、

Poterium (ゲンゲ)

Gramineae (イネ科の雑草) : 非常に高い値 (20%)

Bottema/Woldring によると (p.253)、沼沢地での繁殖の結果

↑

van Andel と Runnels (1987, p.72. Map II) の説明によると、
フランクティの洞窟の前面に狭い入り江が南東に入り込み、入
り江は沼沢地によって囲まれている。数本の流れが、1年の大
部分干上がっているが、まっすぐ入り江に注ぎ込んでいる。

Plantago-lanceolata-type (ヘラオオバコ型) : 強い出方

及び **Mercurialis annua** (ヤマアイ) の高い値はこの地で牧畜
と農耕が既に行われていたことを示している。

Poterium (ゲンゲ) : 低い

森林帯への人間の開拓活動は **Poterium** (ゲンゲ) の弱い値から
それ程活発ではなかったと思われる。

Quercus cerris-type (ナラ型) : 強い (20%)

20%もある花粉値から見て、キラード湾周辺にある程度のナラ

林帯を形成していたと判断できる。

↑

van Andel と Runnels (1987) ,p.76. Figure 5 の説明によると、海岸平野や対岸の丘陵部のナラ林帯を切り開き、耕作する技術を新石器時代人は持たなかった。

Quercus coccifera-type (カシ型) : や **Pistacia** (ピスタチア) などのマッキの植生を示す植物の花粉値が低いことから見て、フランクティ周辺でのマッキがそれほどの規模ではなかったと思われる。

地中海農業を代表する **Olea** (オリーブ) や **Vitis** (ブドウ) が現れていないことは、これらが新石器時代には未だ栽培されていなかったことを意味しているのだろう。

いずれにしても、新石器時代におけるフランクティの人間の活動はそれほどではなかったと思われる。

その後の新石器時代における傾向

深度層帯に広がるナラ林に対する人間の開発活動は BP5400 (BC3400) =EHI 中頃までは、多少の増加は認められるが、深刻ではなかった。

しかし、森林開発は **Poterium** (ゲンゲ) の動きから、BP5500 (スペクトラム 7) まで恒常的に拡大して行った。

↓

それは先ずマッキの拡大を結果した-BP6300=後期新石器時代まで

←**Pistacia, Quercus coccifera-type**

同時に牧畜、特に放牧の拡大を伴う

放牧活動は BP6100 (スペクトラム 4) =後期新石器時代末において極大に達する。

↑

放牧地たるマッキが拡大しなかっただけでなく、BP6000 (スペクトラム 5) から BP5700 (スペクトラム 6) にかけて (=末期新石器時代) 減少して行ったことと関連がある。

BP6100 (スペクトラム 4) から BP6000 (スペクトラム 5) にかけて (=後期新石器時代) の動きは、放牧活動の減少、ナラ林の減少、マッキの不拡大、**Gramineae, Cerealia** の減少と **Poterium** の増加から、農耕地の拡大を想定させる。

BP6000 (スペクトラム 5) から BP5700 (スペクトラム 6) にかけて (=末期新石器時代) のマッキの減少、*Plantago-lanceolata-type* と *Gramineae* の増加はマッキでの牧畜活動の活発化を示している。